

副詞「非常に」、「ほとんど」、「完全に」の修飾能力

疏 蒲劍

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

shupujian@163.com

1. はじめに

副詞「非常に」、「ほとんど」、「完全に」が修飾する成分（＝被修飾成分）には制約が見られる。例えば(1)の「満足だ」は「非常に」、「ほとんど」、「完全に」のいずれにも修飾される。(2)の「長い」は「非常に」には修飾されるのに、「ほとんど」や「完全に」には修飾されない（「これらの帯はほとんど長い」のように複数のもののうちの大多数が長いという意味では許容されるが、「*この帯はほとんど長い」のように単独のものについては言えない）。(3)の「同じだ」は「非常に」には修飾されないが、「ほとんど」や「完全に」には修飾される。

- (1) {非常に／ほとんど／完全に} 満足だ。
- (2) {非常に／#ほとんど／*完全に} 長い。
- (3) {*非常に／ほとんど／完全に} 同じだ。

それでは、「非常に」、「ほとんど」、「完全に」にはどのような違いがあるのだろうか。また、「長い」、「同じだ」、「満足だ」の意味とどのような関係があるのだろうか。以下、先行研究を紹介した上で論じていきたい。

2. 先行研究とその課題

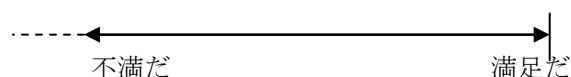
佐野（1999）は一般の程度副詞（「非常に」、「とても」、「たいへん」、「かなり」、「まあまあ」、「少し」など）と共起するか、「ほとんど」のような特殊な程度副詞と共起するかを基準として、状態性述語を4つに分類している。この分類をまとめると、次の表1のようになる。佐野（1999）は「程度性」、「極限点」、「一点的」といった意味特徴を提示している。「程度性」とは「連続的・段階的な状態の幅」であり、「極限点」とは「程度性」のスケールに存在する限界の点であり、「一点的」とは「程度性」が存在しない点的な状態である。

表1 状態性述語の分類（佐野 1999 による）

程度副詞による修飾 状態性述語 の分類	例 (「ほとんど」が名詞句の量を表す用法は対象外)
I 「程度性」を持つ	{非常に/*ほとんど} 長い {非常に/*ほとんど} 意味がある
II 「程度性」を持つと同時に「極 限点」を想定しうる	{非常に/ほとんど} 満足だ {*非常に/ほとんど} 寒くない {*非常に/ほとんど} 素質がない
III 「一点的」である	{*非常に/ほとんど} 等しい {*非常に/ほとんど} 同時だ {*非常に/ほとんど} 一致する
IV それを特徴づける様々な性 質を内包する	{*非常に/ほとんど} 日本人 (のよう) だ {*非常に/ほとんど} 夏 (のよう) だ

まず「非常に」と「ほとんど」の違いについて論じたい。佐野 (1999:43) は、「非常に」にも「ほとんど」にも修飾される状態性述語（表1のグループIIにある「満足だ」など）について次のように説明している。

「満足だ」を図で示せば、以下のようになる。



つまり、「満足」は程度のスケールの中に位置づけられる一方、「満足」な状態の極限点も想定できるのである。このため、一般の程度副詞とも、「ほとんど」とも共起する。(中略) ただし、状態性述語との共起において、「非常に」等一般の程度副詞は極限点を要求しないため、「満足だ」と共起した場合にも極限点は認識されない。従って、この場合の極限点とは、「ほとんど」等特殊な程度副詞と共起した場合に顕在化されるものである、といえる。

(中略) 「非常に」と「ほとんど」との使用の違いは、

- ・{??非常に/ほとんど} 正確だが、間違いがある。
- ・{??非常に/ほとんど} 満足だが、不満な点がある。

等の例での判断の違いにも表れている。

上記の「??非常に満足だが、不満な点がある」のように、「非常に満足だ」は「不満な点がある」とは共起できない。しかし(4)のように中立叙述の「が」を累加の「も」に置き換えると、

文は言いやすくなる。また、(5)のように前件と後件を入れ替え、文の焦点を「非常に満足だ」にすれば、許容度が上がるようである。

(4) 非常に満足だが、不満な点もある。

(5) 不満な点はあるが、非常に満足だ。

これは、話し手は「非常に満足だ」を用いた場合、関心が「不満な点がある」という事態に置かれたいことを示している。一方、「ほとんど満足だが、不満な点がある」のように、話し手は「ほとんど満足だ」を用いた場合、「不満な点がある」という事態を前提としている。したがって、本発表では、「非常に満足だ」は話し手の満足度が高い（＝満足感が強い）ことを表すが、「ほとんど満足だ」は話し手の典型的な満足、すなわち「完全に満足だ」という状態にあと少しで到達することを表すと考える。

次に「非常に」と「完全に」の違いについて考えてみたい。佐野（1999）は「非常に満足だ」と「完全に満足だ」の違いについては触れていないが、(6)と(7)から分かるように、この二者は「不満な点」の有無では区別がつかない。

(6) {[?]?非常に／*完全に} 満足だが、不満な点がある。

(7) {非常に／完全に} 満足で、不満な点はない。

宮城（2016）は「完全に」の意味について「対象のサマの本来的なあり方と一致していること」と述べている。これを踏まえて、本発表は「完全に満足だ」は話し手の思っている典型的な満身に一致していることを表すと記述する。このように「完全に」が用いられた場合、典型的な状態の存在が前提とされると言える。そのため、典型的な状態が想定できない「長い」では「*完全に長い」のような修飾関係が成り立たないわけである。

さらに、「ほとんど」と「完全に」の違いについて論じたい。「ほとんど」は「これらの帯はほとんど長い」のように、複数のうちの大多数については言えるのに対して、「完全に」は「*これらの帯は完全に長い」のように、複数のうちのすべてについては言えない（「全部」「すべて」などは可）。すなわち、「ほとんど」は量修飾ができるが、「完全に」はそれができない。また、「ほとんど」は典型的な状態に到達する直前の状態を表すので、「完全に」を修飾することができ、その逆の修飾関係は成り立たない。例えば(8)のように「ほとんど」は「完全に」を修飾することが可能であるが、(9)のように副詞の語順が入れ替わると許容できなくなる。

(8) 被害者二人の証言はほとんど完全に同じです。（松尾由美『バルーン・タウンの手毬唄』）

(9) *被害者二人の証言は完全にほとんど同じです。

3. 全体的な視点と部分的な視点

量修飾の用法を除外すれば、「ほとんど」と「完全に」の修飾成分には違いが見られないが、「完全に」には修飾されるのに、「ほとんど」には修飾されないというような成分もある。佐野(1999)は「暗い、新しい、丸い、赤い」など、「完全に」には修飾されるのに、「ほとんど」には修飾されないものについて触れている。

(10) 完全に {暗い／新しい／丸い／赤い}。

(11) *ほとんど {暗い／新しい／丸い／赤い}。

(11)の修飾関係が不成立の理由について、佐野(1999:43)は「極限点を表す形容詞として、「真暗だ、真新しい、真ん丸い、真赤だ」等の語があり、「暗い、新しい、丸い、赤い」単独では、その極限点を表しにくいためであろう」と説明している。

しかし(11)の組み合わせをGoogle Booksで調べたところ、「ほとんど {暗い／丸い}」の実例が多数存在することが分かった。本発表は「暗い」と「丸い」は物の全体についても、その部分についても言える形容詞であると主張したい。例えば「{部屋全体／部屋の大部分}が暗い」のように、「暗い」は部屋の全体についても大部分についても言えるのである。同じように、「地球はほとんど丸い」は地球の大部分が丸いことを表している。一方、「新しい」と「赤い」は物の全体について言わないと、成立しない場合がある。例えば「この車はエンジンは新しいが、タイヤは古い」ではこの車の新しさについて判断がつかない。強いて「?この車はほとんど新しい」と言えば、車を複数の部分に分けて扱うような発想になるが、許容されにくいようである。「赤い」についても同様なことが言える。このように部分的な視点で扱える状態を表す語は「ほとんど」に修飾されるということが分かる。

4. おわりに

本発表は「非常に」、「ほとんど」、「完全に」の修飾する成分の意味特徴について考察した。今後、この3つの副詞による修飾の可否を基準として述語の意味特徴を分類する予定である。

参考文献

- 佐野由紀子(1999)「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究』第6号. pp. 32-50
宮城 信(2016)「完全性を表す表現と副詞的修飾関係」『日本語文法』16巻1号. pp. 3-19